

被告人を懲役 2 年に処する。  
この裁判の確定した日から 3 年間その刑の執行を猶予する。  
訴訟費用は被告人の負担とする。

一方、本件当時、①被害車両の前にもう1台の自動車が多摩川沿いの歩道上に止まっていたか否か、②被害者Bが、被害車両から離れた時間がどの程度であったかなど、被告人の供述と被害者の供述の間に食い違いのある点もある。そして、①の点については、犯行直後である当日の午前10時40分ころから撮影された写真撮影報告書には、被害

車両の前にもう1台の自動車が停車している状況が撮影されているだけでなく、証人Dの供述及び捜査報告書によって一応裏付けられており、また、証人Bが、これらの点について特に事実と異なる供述をする理由はうかがえないことからすると、少なくとも、①の点については、被害車両の前にもう1台の自動車が停車していたと考える方が自然である。しかし、逆に、被告人が自らの意思で本件犯行をしたとしても、上記①、②の点について、ことさら虚偽の供述をしなければならない理由も見当たらず、これらの食い違いは、完全に解明されているとはいえない。

他方、被告人の供述によれば、5名もの男が現場付近に集まって被告人を脅迫し、その後、そのうちの1名と被告人が、相当長時間にわたって現場付近を行き来していたというのであるが、現場付近は、工場や事務所が密集する市街地であって、午前10時前後という時間帯を考えると、人目に付く蓋然性の高い状況ということが出来る。しかし、関係全証拠によっても、本件当日の午前8時30分ころ、午前9時30分ころ及び午前9時53分ころ、それぞれ、本件現場から少し離れた場所で、見慣れない自動車が駐車していたり、若い男が2人座り込んでいたことが目撃されているが、そのことと本件との関係は全く明らかでなく、他に、被告人が述べるとような事実の存在をうかがわせるに足る客観的証拠は存しない。

そうすると、結局、本件の実事関係に解明が尽されていない点があることを考慮しても、被告人が供述するとような事実の不存在について、合理的な疑いがあるとまではいうことができない。

(法令の適用)

罰		条	刑法235条
執	行	猶	刑法25条1項
訴	訟	費	刑事訴訟法181条1項本文

(量刑の理由)

本件は、自動車の窓ガラスを消火器を用いて割った上、その中にあった260万円以上の現金等が入ったかばんを盗み去ったというものであり、その犯行態様が手荒いこと、被害結果も甚大であることなどの事情に照らすと、まことに悪質な犯行というほかない。

しかしながら、本件の立証上、上記のとおり被告人が供述するとような事情の不存在について、合理的な疑いがあるとまではいえないが、本件犯行を被告人が単独でしたとするには不自然な点があり、他方、共犯者の存在をうかがわせるような証拠もなく、結局、いまだに解明されていない点があることは否定できず、この点は、量刑に当たって、考慮せざるを得ない。さらに、被告人は、かばんを持ち去ったこと自体は認め、安易にこのような犯行をしたことを反省していること、本件犯行の翌日に自ら警察に出頭し、犯行を申告して自首していること、被告人には、少年時代の平成9年に窃盗(車上狙い)の前歴がある他は一般前科、前歴はないこと、結婚して1子をもうけ、父の事業を手伝うなどして相応の社会生活を営んでいることに加え、現時点では受け取りは拒否されたものの、被告人の父が、被害会社に100万円を持参し、示談交渉をするなど、被害弁償の意向を示していることなど、酌むべき情状も認められる。

そこで、これらの事情を総合考慮し、被告人に対し、刑の執行を猶予することとした。

(求刑 懲役2年)

平成16年10月13日

神戸地方裁判所第4刑事部

裁判官 笹 野 明 義